

毛子集
全

5
1462



割
1462
巻



もととを集の引



皇祖道徳の爾ハ生涯 單衣一蓑の隠士
 丹一多力を後うらやうとて言と 姫牛れ
 住家志つゝいふ事いゝも 又ふ後ひも止の歌
 世を旅ふべかしく 向のほろりて 馬の心を
 身も常ん花をふ情をさか 西へ折
 日の影ふらも 東へ折水入日 木陰も
 不傳ふ ぬきり 九詠七甲成の ぬきふ

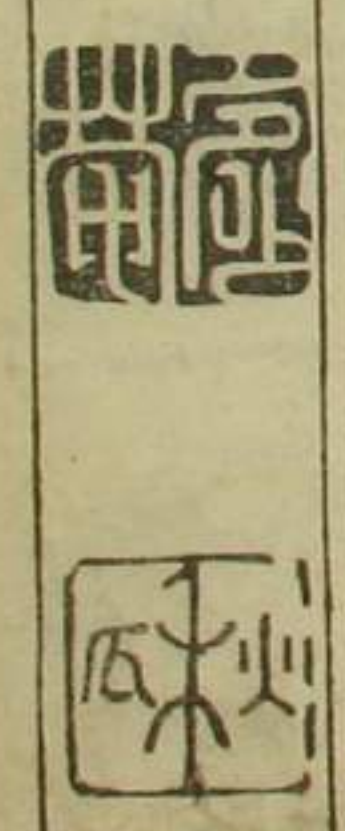
難波津の宿に宿りてと道ゆい其體ハ
雲の時の義仲とあはれとるるをいふ
ふくぬや枝尾の宿とて一集の宿の題ハ
詳るりく——其徳もや枝桑の園ハ
後まてく三都いありて津ハ海ハ心の奥の
まてくあはれとるるをいふ
心体とていふ其ほくく碑とて建て
て南をあらはれりて——言ふ東武
海川長慶福の碑ハいふるるいふるる

おきれ及其角花雪の三碑ありて慶長
里をたを徑く諸人の物一途とていふ
初る人をも一隅に埋もれりてを東映居士
慈念再興の志ゆき此所の慶長をいふ
且は碑のまてくするをいふ
一線力を合け長慶現住はうりと大楠
乃りて土地を撰し三碑を後一垣徒し
某門をいふるまてくするをいふ
蕉思のまてくするをいふ

新彼其余光を継ぐ己ふ一万年
 向くとまはけくけつ羽の生あを思ふ
 天中一あ心の空ふく世後人の世後
 只天工自然の物景も昔の生来時
 川陸日徳我と或いふ花さきぬや
 いろあまたいさくちやとこあつて
 さねもいろもあふあふはく福下
 一さやん高く世を種あひさむあり
 昔一糸一くハ後子といふ助を

之す一く志を継ぐ人ハ後を
 めらもはく連綿とおこふ事
 欲一さふ小冊子のあふ
 採く其意増をくわく敬く
 P 本あつて

干時寛政四のく一子孟冬
 白の菴秋心





追福百韻

其夢乃枯也今亦性寂了
 小春乃今也 雨 雪 霜 笠
 制 札 毛 活 毛 代 君 聖 持 子
 若 子 泉 毛 起 亦 毛 一 家
 湫 澗 の 池 元 ハ 子 何 毛
 祥 毛 毛 毛 新 の 子 毛 毛
 掃 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛
 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛

木瓜

波 靜
 楚 派
 吳 詠
 五 嶺
 素 齋
 柗 後
 圓 瓜



吳詠

ひしきを怖い中より星をとり
つよしとを執る 残れ 殿
焚付く 居て 眠る 蹴る 成
軒 踏しと 本氣の 泣れ 紫屋
松ふ月の 虫ふる 入り行し
甲のく 糸次 虫 居る 山 暮え
懐中の 胎へて 拂う 柄川 居
只 去白ふ 内陣 寄る 幣
半輪の月も 來た 山 けし

石牛 恭阜 長布 花英 御光 暮蟪 東李 鳥光 素雅

身と居替り 懐き 寄る 細い本
まぐろ 物重 終る 居る 手 旅 くる 毎
人、 高人 と くら 响とせ 執
桑の下も 細い くら の けし くる
雷 神 本 来 日 斜 なる
今 的 なる 子 くら 袂 なる
ふる、 けし 呼 居る 湯川 草の 依
遠く 居る 善 誰 なる けし 奉 加 帳
身の上 なる 新 綿 寄る 虫

晋佐 仙子 周南 五津 如行 里修 登水 素言 又宣

西風を吹ききりし十三夜
 清工の籠よりあけし月を方々見れば
 去んくんと駿者の鈴の流りし
 暇に下り橋より流るる水
 花見の田子の口と明く日よ
 子芥の日のあけしとあけし
 三 時とあけし馬止のききりし
 途におくまきりし おききりし 駕
 後ろ 徒をうえて 耳にふり

素秋 止山 田保 義市 文江 千翹 路長 把菊

此戸を明く無煙の日は
 運まき牽るあけし老軍の中
 沙海の子紙を仮名におり
 松よりとあけし橋より 賀乃流
 生より松より 先へ うち水
 水景を庵より 庵より 庵より
 月ハ一橋の流ハ 庵より
 膏葉のくさききりし 痒き尻をも
 石よりし 来し 入船 芳ら 花

画松 路白 左来 北翹 幸雅 湖雁 白枝 松叙 範路

るやきつるも日毛きつるも
ことし使のさむし可く
岸狩のおゆし品もと能く
能く日あきらむる住持一廣
學のちい子の所ぬ所も
部くの時あきらむ供待
和晴うき續く聲入骨入
青衣の層もふあきらむ
又まくもまきもあきらむ鮮者

喇二
有鯉
年路
兔園
伏示
沙路
如岡
宗普
山島

草臥道の枝引く序

山島

吾風も清くさるるもぬけ糸
清も霞も自あきらむ
河植の花も蒼し旅人先
世間知くすも律者境界
川初も涼も水中一日路
糸も少くゆきも入あきらむか
去中、古才も娘の中夜も
度々其の意もあきらむる也

呂中
我后
恭我
東林
連金
寛志
古行
不及

池の蓮の華はとて青もよ
露を草履も道真第う
耳中へは流るぬをうらまへ
を中へふふまよと梅は思髪
るはくと云月を記す川の風
城下へあつても入る橋
定りかき齋へつても無城王
宿へ續へて手書る暇るに
釣橋の一かき字へて返るしと

南枝 徐来 里杏 中和 岩白 谢人 後育 花明 東張

哉

津へつとくく鳴る夕ぐも^の海
と所より毛を記越路の月の秋
色はく霞を 松蘿 おろく
生翫の昔をい出たは行り前
線えふれり青川 小娘
深御も心よる川へ極 岸島
岡をあつてふ郎 去多らり
川果るるもよるし 山 縁
あやをあつていふれむ 木書りし

辰邦 新如 恒牛 久江 今嵐 深嵐 東翠 岩之 恭系

九

時よりあつたを言ふ事花供事
影のさす影 影のさす 影のさす

霜後
波景

諸家 遺稿 吟別録号

四季之吟

陽光の影のさす人々の肩の上
影のさす影のさす影のさす
影のさす影のさす影のさす
影のさす影のさす影のさす

暉常
恭哉
夏晴
冠李

川狩の影のさす影のさす
一羽常の影のさす影のさす
影のさす影のさす影のさす
影のさす影のさす影のさす
影のさす影のさす影のさす
影のさす影のさす影のさす

亀鶴
楢光
蒲夫
千夫
文狸
羽貞
柳條
此川

一本はす 樹の替り 葉摘うれ
水底より 水石の動く 水結了日
葉の葉の 露光る 水石下 園
盗人 葉を 大根ふ 高し 小根し とも
鏡を ちり さらぬ 日飾り 花の 花
貝ふり 珠 翠の 崩ま ちきり ちきり
白の あら くら 浅瀬の 天 夢 河

巨仙 萬籟 朱雁 卯乙 鈴吳 兩柳 珠

草くちり 宵の 一 暮り ともろ とも
節 一 花 ち ち 捨り 庵れ ち
花 四 毛 獨 法 七 清 水 ち ち
海 ち ち 白 の 暮り ち 神 一 ち
は 川 霧 ち 橋 ち 旭 君 ち 橋 ち
新 養 ち ち の 暮り ち ち 白 ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

大菊 山江 秀外 龍津 東鳩 蓬平 時丸 休人

相下と行まふもろしきうふ
 表家うゝまの葉内や菊の花
 蓮花く山子音あふ町るうれ
 小まふ毛入日の長き枯や下朝
 色ふをる眼の見く紅葉うれ
 山吹や夏のもりもをる五内をまふ
 かき海ふや秋出あま行日のあま
 余の落はゆふもまふぬね露が

里塘 藤子 千下 杉川
 羽橋 左丹 白山 因靴

可晴也野の草莖日あま
 寒菊やあまりいんれ草の骨
 水と水満を出する氷うふ
 水多や水を鏡つて羽つく鳥
 水ゆらむるこゝあま行田唄が
 ちりくくと雪うらゆり青鳥
 梅まら〜長〜短〜糸糸
 産 かわり 見そえあま流〜
 雛子る〜やま子郵く里の家

敵蹤 茂陵 鳥夕 義由 如水 里羊 坂戸 巴久 可情

海山の色を倚るやはつ時雨
行船のいほりしを記 海の音
垣るふい 鶯の落羽の紙の風
あふれ 波の替りぬ物や松の花
葉のそれや 山吹の雨の罨り
まを 刻わ 時自ふさ ぬ花の色
橋を行く 音あふる 夜の空
まふら いろあふる 雲の衣
蒼うら 雲をこふ 春や 花の花

那風 松石 濤棧 卜乙 和夕 梨風 雲圃

武羽生

春将お旭、溜れ 供あふ
柳葉の多の 聲く 橋下南
道 露毛い ぬ色より 女中子舞
曙 春の 松の 音に 花の いろ
解 啼 や 日 の 照る 松の 音 中
蒼 うち 雲 霞も 牡丹の 花
ほんの 中し 夜に 旭の 紅の 花
初うら 春 子 満き 万金の 花

我后 暮嶺 花葉 仙子 問南 五津 里松 東李

駢如きく出多れと先之町るれ

上之邑

五峰

風也又く流き世名無あり

池守

其朴

翠峯を別ありとて毛二川宛

小棚

年くお都く高り水空うれ

左束

湖有り下より多し今おのを

画杉

南河上

華印

か見風り明しと種お海空雪

上中条

其葉

林一さいり海とて流えと水のそ

永泉

風乃日者千るや川者曲り取

江谷

妻女

所く流きいり取 枯即うれ

古河上

一瓢

高小

干棚

森かときやく色や納豆汁

小汁

竟去

た川言や一夏の枯即や雨く子者

下見

路長

秋半川を流し取行く白帯

已陵

野のたゆや帯一の菱く一物

祇来

青嬉し一町をと菊 寄 枯障子

下中条

其川

給書也ちつる物おほく行く

式程

止山

きしつたふたふたあふくお花ゆれ

呂中

白唄いこももあふきらら

深月

新舞入流の山後書り為るうふ

田保

大勢ふ足きりあふるは四植うれ

如 秀良

かきよふ糸の枝の半一あふ

形蔵

まくだの一本の木の今も松

貴十

草もよも草とま川ゆきまの香

木田 松松

月古く月待る月お菊書りえれ

永田

溪舎

新ちくく香取地おるはえんうれ

芝紅

武金川

千種さく地を一色お枯地が

連金

そまぢく葉内もへぬゆ干が

為白

芝浦の浦先も深くむ村もみち

豊鼎

あふりい所一日の帰る為るうれ

範路

あふりい所一日の帰る為るうれ

しる

吹雪く鹿の芳光お月あが

しる

徳松居士書畫連

眠入りや宵始極老の寸面
 此れやとてさきもぬ海の白ひうれ
 水多や樽を親する三并の帯
 為自やこよひ行徳多師の人
 床すさやまのこころ菊乃畑
 忌替しる衣も芳一菊乃目
 算りりや芝蔴ふしく人さる
 羨如く夕日うつさ花散らうれ

長布 定雅 醒松 菊二 千里 思水 亀玉 喜花

石燈籠をさくく覗く地紫うれ
 糸糸那野毛群く日暮うれ
 行旅や標系の風を音
 蛇書り尺巾の明書社や友古立
 八朝や春多川竹多明系うれ

雨多 糸夫 岡志 多糸 派楚

常安塔
 清山
 忍大森
 青竹

夕の一枝遅くや人暮候
 菊出くや島望く月多干様馬と

煤く不事皇の氣を少つてよ 白
宮子も茅屋の表を漸く雪
層の氷を流し去る日と暮ら
菊のちりぬる房の也初一修連

禁断の場を余當る亭にうれ
陽半の帆を越え軌く砂をう上
菊の時の姿見をきく花火の如

跡をの氷をとりしめを流はる
子らとせハ碎りしち也 拙者も花
晩清を中め日をもと一花りし
引く雪を走く漁火の明滅り
八月の影をを淋し鹿をう
川音の高く入りし夜をうれ
百菊の八日暮る雪を化糖也
葉の花を白紙ををふりし上
水の橋も雄姿し 遠山丸羅

勢峰

理玉

治景

桺也

真る川

急性

勢久辰

之箱

秩父一日

知味

芭江

片夕

渡江

柏翁

秀哉

危遊

草危

舊路

楚雲

梁舟

江魚

石の口とく音あつては月珠
行の岨ハヤも滑ゆくは流うれ
初る事ハ常日蒸た黄をうら

相浦賀

鍊石
十洲
棧尺

能き風親るは衣をよれたく空

甲子出

石片

白く白樵まの素をあらうと影友

何身

暑き日ハ乾瓢の記不考の上

旭冬

いそつよの眼より川城をうらうれ

萬力

行我

おのり雨をうらうらまをく山終のれ

山一古

流しむく定み神れ屋をうれ

常瀬菜

口瓶如

馬の脚ハ草もと馬の足花神うれ

鮮田

古仙

行秋や草もとるまもて虫のうら

鬱之

古中の事ぬかよ雨を佳うれ

安食

其白

ゆりもいハ世を歡へるよんこ争

三邑

東林

茶大根を是う旨く食ふ者
不承るも男も是う。角力うれ
掃ハヤ 高丸 薪の申ふ 松家了不
命のくれや園を雨くく 垣取く
まいれおきく 漆木の屋敷うれ
山葉衣や百年 先平咲き 總
昂くく 夕日庭もくき 尾葉か
若くきの果も目出しく 寺葉山子が
海くくも不二の氣 けふくも

牛邑

有之

文宣

幸手

宜蘭

栗橋

頭丸

青牛

樗山

水崎

月指

中田

兩川

消うれ 缸の裾うく 雨うれ
聲ひくく 半かき 芭蕉了自

吉江

兩交

大白

尾池子

開二

芦帆

諸江

白圭

里雄

晴枝

初あから 暹さ久 群皆 雲葉うれ
小夜多る川もあう毛 流るる
あふの香不見ぬ人 座一 住 所
葉のとれおきく 新 寺宇治の西と
けりあふ 千色 啼き川 けり
焼 蕨の 肥の 行 信や 終子の 命

雪々五毛神堂も行く可もうか
花も狂ふ名醫のたふさるもこれ

芦花
魚山

忍城

小春ふ毛ゆりいさく散はり櫻

青我

一節も涸幾か法の水う直

魯道

琴舟一く耳も残さわ郭ホトトギス

方雅

綱ニハシヤわを行くくさる日ニハシヤの残す

毎涯

一夜り友啼一睡す蛙うれ

星羅

花守の第も骨や春の暮

止水

更たほと水音高ら夜をうれ

其幸

月を東の日はかワリくわ水心美

寒松

柏堂ふ秋の雲をわ市後川

五雲

右所く黄昏暈暈一五月雨

桐藿

歌本冬冬の立立くハ種種前前く本本冬冬

器水

後後置置一一葉葉ふふりりわわ水水心心花花

青湖

おの徳徳く名名月月尺尺まま一一ややのの巖巖

義市

峰峰一一ふふららくく月月ふふささいいぬぬ可可るるかか

年路

忍明る庵連

拍簿一昔やみおやうを
けかよふそとく細一鹿の
あゝおそく鹿一色わふ
稲村を小多のどく叶る
日も花も多し書一々
味うりの鳥憎子も
初をわするやま
早ふんむと後せん

射人
義邦
花明
東翠
聖彦
後智
東張
表阜

葉のたれわをらん

石牛

高田

在馬太夫

芭蕉えわりも
日一たの

水府
文江

鳴林
池水
早川
高行

冷
葉夢
後川
馬末
車大

又掃川一止かとするは、俾木の葉

江百
急又

冬の日暮る川あしくそよお水仙苑

楚流

江上あしく籠る細工の葉のまが

素膏

流るる夕の満干やあつそあ

泉花

る川をわ曲折るいそ若とそ

一晚

所を川を流るる星のうらる頃

汁南

曙をる碑一青一雲一と程

恭我

かゝるる瀧の音ゆく雲うれ

五山

我う家も中く廣く煙るるい

吳御

一日をる入お静る葉摘うれ

波靜

牙室と川と捨るる星をぬ取をが

尺五

川も流の心地るるす終郭一上

敲氷

こりこりの明像違一八重霞

乱竿

一川家のゆるみ若る車る那分が

柔我

行もあすやの返一わ夕一とそ

霜後

まゝらゆらゝ 晚清中や秋のそ

秋瓜



古池の

陸飛こも

水常々音

做裏翁画自今亭
吳詠謹寫

其深の如き色紫心初しき

暮林

今植し竹ふああや夕

柳居

よ乃山の花の木の間の花んか

鳥碎

ふんこを啼や山葵の花生

方盤

ほひこるとちり渡るは山里の梅花

川庭

を折や人常力い流のそ

巻阿

泉意之吟

雪色の松を山にわ保とてきき

吐花樓

和歌の口を披く多し南川

南川

携ふ花とてる戸を音わむ乃雪

楓人

ふまわをさるる眼を毛義し女

楚語

肌始はく木をさるる取の衣衣

琴堂

能く見せし人地味をく見

鯛餅

單をさるる音しに雨よと

希景

紫しを花より外を心き

仙泉

高はく紫も及ばぬ瓢の如

花天

高きうき常同常小常了な

中精

投入しを草におはる常う如

瓢船

高りよハ氷とるわ自口とま

高路

梅の香わ竹ふかしきり

梅溪

梅さぬおまのきわむと如ハ

交櫻

活る肌、桔梗を味わく山の菊

桔嵐

思ふわ地くゆりきり里の虫

花徑

字く口をのくわくふするわ草の種

茂雪

柿のこころいかにふれぬを
古珠

焚く知も岩も蘇るるし鹿の
千橋

石引もゆるそとすゝ家
千泉

蘇りわは流もきき供も
芳社

五六河原も枯るる
柏亭

重りくはは体正日わ年
眉端

すいごとくもは梅の芽
梅月

別らもマソ花もさるる
捨毛

通夜の眼の力草もり梅
煙水

流先君知もぬ海うら
芝六

中干わちきもたきも
車車

分考わ一羽と月
五溪

青赤わ水もさるる
波江

剛力のぬく物も
且中

散らもつらなは流るる
玉簾

字ら水の乾く河も
草光

春もわさふ工ま
蘭陵

夏もわさふ工ま
青善

星合を待得るも只一夜 風夕

形もいささか隙のあまき 舞子の影 芳旭

更科を捨てるもさるる居る葉の影 柳志

字もさるるの枕もさるるの部 白

雪の啼く枝もさるる梅の影 抱雪

ハハ梅のこころも咲くも 鳴子籠 葆光

舞子の年ハ字もさるるも花の影 白芝

柳井の明く所ハ寒くハ 下道

この日の羽もさるる軽なしるが 辛青

川ハ水もさるる優しく 越すも守るのまは 白素

田もさるるおもしろく ぬ 日者 了如 東去

梅の枝の赤もさるるさるる 蒼うれ 如夷

字もさるるおもしろく 蕨ハ 京の葉 扇下

山もさるるおもしろく 柳の影 万壺

草もさるるおもしろく 捨ハ 金の影 遠子

礎の甲もさるるおもしろく 千老

近藤の葉の赤もさるるおもしろく 暑者ハ 葉の影

夕川の虹もさるるおもしろく 毛もさるる 寧山

川中をゆく伊勢の風

巨流

世の中をゆく那の花を旅

富山

那の山をゆく那の谷をゆく

那の谷

桜の香の空を隔ぬ鳥の日

五原

川をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の谷をゆく

那の谷

我々の歌をゆく那の山をゆく

那の山

見よよしよ水のゆく那の山をゆく

那の山

常の山をゆく那の山をゆく

那の山

右の山をゆく那の山をゆく

那の山

左の山をゆく那の山をゆく

那の山

主の山をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の山をゆく

那の山

那の山をゆく那の山をゆく

那の山

五

那の山

清静のまもりて蓮のつれ 朝生 藿徑

秋の月おのせりきハ軒の家 ゆ久

虫のいふま紙 傍るわきの雨 龍尾

空の星を眼くゆきも紙衣のれ 鈍子 紀寺

るるわ白い 競た 梅を枝 松年

山風の落葉く言わ小曲の白 其色

梅さくわ亭の法ふ旭をるおる 梅年

かーゆー帝とく新ま怪 志之

花もすさ 其のまをわ扶也る 大如

炭燵のまもりて 羽生 相舎

塚うゝお羽さくわ梅のま怖 其水

酔醒の目おりーるーまの香 三市

次のるい供の軒 おとー 志 志耳

しるやまの神を 指を 新 佳石

刺さるうゝまふい 初るり 紙 紙中

鳥といひ咲ぬ 内るり 菊の花 徐杉

あまもまわ折ふ 水鏡の 終 泰里

空見たり た 此 木 砂 は 草 須か 里桂

時をわき借りしる旅始事 思 紫立

山崎の山に心まきわきくま 南打

山中の月、飛ぶむ怪うれ 素而

藤の山に心付く思者うき 百里

牛と越す川もあふふ一鏡月 本嵐

若らうわおきも青ふ湯と居 五葉

きの山に心まきくま 秋石

湯色の時代瓦お露まきれ 飛石

下を信まらふ山の梢お梅の花 家人

吹止むと屋根ふるむる若うれ 若鳥

は月をわ指いあす思れ 銀糸

思ふわ布まき 手拵

凡の衣の音明滅お梅うき 不雪

葉まき、若うらほりわ神く流 冬樹

百まきく心傳りまき 百綱

御植の心 競わき 梅童

心まきく心傳りまき 梅子

人の配の布ぬ所まき 来儀

浮佛を身代ふしつ時音ふふ 於崇 希ル

暁をええく眠し暮るる 高崎 糸江

七夕のおまひ知しし一十之夜 崇泉 水樹

さうろくを毛子の似ぬ水うれ 白雲 仙里

水の流れを種子の住所 田伏 娯身

むし房ふまの日はわ散の氣 高松 是橋

青若も肝お物るやかんこ 高松 其多

見遠し一十年の接後や楸の花 高松 文志

郭を免い流るる 志州 本羅

かまひりよわ雁を結ぬ 下 市南

芝草や神未い橋よ小舟川系 杉 夜中

ゆきをとも降るるふかしく 高松 湖雲

雲をたれと素なふよきり 崇泉 棠木

他とくも動ふい橋のぬ花押 高松 枝白

水吹ハ 滅 高松 帳則

子のおこり 東武 冨光

地とほし 長車

橋まわ 高松

